



「福島支援交流会」に 全国から170人が 参加しました

福島県生協連・全国生協

2013年9月20日～21日、福島県生協連が主催し、日本生協連や福島県内の消費者団体などが協力開催した「福島支援交流会」が、ホテル福島グリーンパレスで行なわれました。これは、福島県の委託事業として実施されたもので、生産者と消費者の交流を主なテーマとし、全国の生協からの参加者や福島県内の生産者ら計170人が交流を行ないました。

一日目の交流会では、福島大学の清水修二教授による「福島原発災害の現状と『支援』の課題」の講演や、原発事故の被害で全村避難をしている飯館村の婦人会長の佐藤美喜子さんの報告などが行なわれ、二日目は、米の全袋検査場の見学や、JA新ふくしまのモニタリングセンター、土壌スクリーニングのデモンストレーションの見学が行なわれました。

一日目の交流会では、福島県生協連を中心に全国の生協が支援を行なっている「福島の子ども保養プロジェクト（コヨット）」や「土壌スクリーニ

ングプロジェクト（どじよスク!）」に関連した報告や会場発言もありました。「コヨット」参加者の平井華子さんからは、「子ども同士、親同士の交流の機会を持つことに大きな意味があるのでありがたい」といった内容の報告や、福島が生産者からは「どじよスク!」に関して、「全国の生協が、私たちの農地を測りに来てくれ、その結果を全国に持ち帰ってくれるのはうれしい」といった声がありました。また、交流会の会場には、全国の生協からの募金で浜通り医療生協が購入した、FTF搭載トラックの検査のデモンストレーションが行なわれ、多くの参加者が見学、体験をしていました。

※ 放射性物質から放出されるガンマ線を検出する、放射線測定機器。



「どじよスク!」の測定の様子を説明するスタッフ。参加者は、熱心にメモをとり、質問をしていた。

被災地からのメッセージ

全国の皆さまへ

あいコープふくしま・副理事長 **橋本拓子**

全国の皆さんからのご支援に感謝の気持ちでいっぱいです。

私たちは、「地産地消と安心、安全」にこだわる活動を基本にしてきました。しかし、東京電力福島第一原発事故による放射能汚染で、この福島で生活ができるのか、地元の農作物は食べられるのかといった不安の気持ちが限りなく広がりました。組合員数は、県外避難により4分の1が減少しました。

私たちは、こうした組合員の不安に寄り添い、涙を流し、語り合い、交流を行ってきました。そうした中で、この福島で少しでも安心して暮らせる条件を積み上げてきました。

その条件のひとつに、地元の農作物の放射線量測定と内部被ばく量を測る「測って安心、測って対処」の活動があります。内部被ばく測定は、あいコープふくしま独自に設置した簡易式ホールボディカウンターで、この5月より本格的な測定が開始され、300人を超える組合員、その家族、友人などの測定が



行なわれました。測定者からは、「安心しました。また1年後に測定します」との声が聞かれ、安心の広がり役割を果たしています。同時に、測定後に交流や話し合いを行ない、放射能に関する不安の解消と、「あいコープ生協生活」の充実の大切さを確認する場にしています。

また、ホールボディカウンター設置と同時に発行した「この子の未来のために」（あいコープ健康手帳）は、ホールボディカウンター測定データの記録保存だけでなく、両親が子どもの健康と安全のために必死に努力した生活の記録でもあります。放射能対策はもとより、無農薬の作物・食品添加物を使わない加工品の摂取、合成洗剤を使わない石鹸生活を記録できる欄も設けています。この健康手帳が、将来、子どもたちが健康的に育てられた証になり、福島に生まれ暮らしたことが人生のハンデにならないようお願いを込めました。

福島現状は、「復興ではなく救済」という厳しい状況です。今後、私たちは「たかが3,000人の生協、されど、あいコープ生協」の心意気で取り組むのと同時に、皆さまの協同の心と組織に支えていただくことを、あらためてお願いいたします。

メッセージ全文は、日本生協連「復興支援ポータルサイト」内、「つながろうCO-OPアクション情報」ページをクリックし、ご覧いただけます。「日本生協連 復興支援ポータルサイト」でインターネット検索を。